

春団治 VS 志ん朝

東西サラブレッド落語家対決 in 茨木



東西の大看板が偉大な父親～二代目春団治、五代目志ん生～ゆずりの得意ネタで火花をちらす大一番！

●入場料(全席指定席)

1階席=3,000円 2階席=2,000円

※割引: 24歳以下、65歳以上、障害者及びその介護者は各料金から1,000円引き

●チケット販売所(3月12日発売)

(財)茨木市文化振興財団 0726-25-3055

ローソンチケット 06-6387-1900 [Lコード57890]

チケットぴあ 06-6363-9999

※ぴあ、ローソンでは割引の取り扱いはありません

●お問い合わせ

(財)茨木市文化振興財団 0726-25-3055

〒567-0888 茨木市駅前四丁目6番16号クリエイトセンター1階
月～金、午前9時～午後5時15分、土・日・祝日は休業

●主催

財団法人大阪府文化振興財団

財団法人茨木市文化振興財団

●制作

三栄企画

●構成

相羽秋夫

平成13年

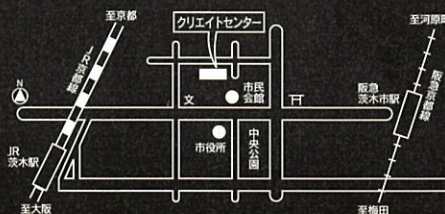
5・23

【水】 昼の部=午後2時00分開演

夜の部=午後6時30分開演

(開場は各30分前)

茨木市クリエイトセンター(市民総合センター)
センターホール



JR茨木駅から東へ徒歩10分、阪急茨木市駅から西へ徒歩10分

【昼の部】午後2時開演

解説/相羽秋夫

「開口一番」桂 春菜

「祝いのし」桂 春団治

中入り

トークコーナー《父を語る》

太神楽/海老一鈴娘

「火焰太鼓」古今亭志ん朝

お囃子/なにわの会

*

【夜の部】午後6時30分開演

解説/相羽秋夫

「開口一番」五街道佐助

「火焰太鼓」古今亭志ん朝

中入り

トークコーナー《父を語る》

太神楽/海老一鈴娘

「祝いのし」桂 春団治

お囃子/なにわの会

春団治vs志ん朝～東西サラブレッド落語家対決in茨木

●平成13年5月23日(水) 昼の部＝午後2時開演／夜の部＝午後6時30分開演 ●茨木市クリエイトセンター(市民総合センター)センターホール

●1階席＝3,000円／2階席＝2,000円 ●24歳以下、65歳以上、障害者及びその介護者は各料金から1,000円引き

●主催：財団法人大阪府文化振興財団・財団法人茨木市文化振興財団 ●制作：三栄企画 ●構成：相羽秋夫

父を語り、お家芸を演ずる

落語界の「梨園」育ち



相羽秋夫

演芸評論家
大阪芸術大学教授
茨木市文化振興財団理事

歌舞伎の世界では「梨園」といって、名門の子どもが、代々看板を継ぐことになっている。落語は、それほど厳格な制約はないが、それでも父親の名跡を継ぐ例が少なくない。

今活躍している上方の二世落語家は、桂小米朝(父・米朝)、明石家のんき(同笑福亭松之助)、月亭八光(同八方)、桂春菜(同春蝶)、桂福若(同福団治)、林家染語楼(同三代目染語楼)などである。

染語楼をのぞいては、まだ前座名であるが、いずれ父の名前を襲名することになる。

そして、三代目 桂春団治である。父の二代目春団治の看板を昭和三十四年に引き継いでから、今年で四十二年目になる。とりわけ「春団治」の名は、上方落語の象徴のように光り輝いている。それだけ責任が重かったが、見事にプレッシャーをはねのけての現在がある。

先年亡くなった、ギョロ目でダミ声の六代目笑福亭松鶴も、五代目の父の名を引き継いで、三代目春団治と二世落語家のタッグを組んで、戦後の上方落語界を引っ張ってきた。

三代目春団治は、デビューは小春の名で、次が福団治、そして春団治と名を変えた。つまり、小春→福団治→春団治のルートが、出世の方程式なのである。

余談ながら、映画や芝居、あるいは歌謡曲などで有名な「後家殺し」の初代春団治が、昭和十年に死去した時、二代目を誰にするかで、有力な弟子が二人はあった。

それが福団治と小春団治である。そして福団治が二代目を襲名した。それから福団治→春団治のルートが確定したのである。

さて、東京から来演の二代目古今亭志ん朝は、これまた東京の大看板五代目古今亭志ん生の二男である。因みに兄は十代目金原亭馬生という落語一家である。

普通の人が、十五年から二十年かかる真打への目標を、わずか五年で達成したということである。それにもかかわらず、まわりの強い要請に押し、志ん生襲名を実行しない。

春団治と志ん生という東西の名跡の家に生まれ、父と同じ道を歩む春団治と志ん朝。他人にははかりしれない苦悩と苦闘がある。

この企画は、「父の日」とも連動させて、落語という社会と家庭の間で生きている二人の肖像と虚像に迫る画期的な催しである。

私が聞き手になって、この二人の名人の本音と素顔を浮き彫りにしようと思う。どこまでそれに迫れるか、私自身も胸わくわくである。

出し物も、父ゆずりの名作がそろった。

春団治の「祝いのし」は、つけ焼刃の口上を述べるのに四苦八苦する滑稽筋だが、あわびの製法や、のしの起源など、ためになる内容になっている。二代目の十八番の一つで、三代目は忠実に父の話を守っている。

志ん朝の「火焔太鼓」も、志ん生十八番中の十八番。夫婦の情感と、武士と町民とのやりとりが巧みに描かれた傑作である。志ん朝の現代性あふれる、テンポアップされたおしゃべりの粋をたっぷり味わって欲しい。

二人共、油の最も乗った句の落語を展開すること請け合いである。さしずめ落語界の横綱が

堂々と四つに組んだ、熱気あふれる高座が期待出来る。

落語ファンならずとも必見の会である。昼夜二回制で、皆さんの便に供しようという主催者の熱意と誠意を汲みとって欲しい。こうした二人を盛りだてた人たちも紹介しておこう。

紅一点、海老一鈴娘は、やはり母が鈴子というこの道の先輩で、小さい頃から母の薫陶を受け、「太神楽」という曲芸の伝統を守っている。かれんな容姿と、若いに似ずなかなかの技術で、評価はうなぎ登り。これからまだまだ大きくなる。

このような緊迫した会にはもってこいの存在である。どうか大きな声援を送って欲しい。昼の部の桂春菜は、冒頭に書いたとおり、故春蝶の長男だ。

父の通夜の席で落語家になることを宣言して、父の師匠、つまり三代目春団治の弟子になった。蝶は菜の花が好きと言うところから命名された。

坊ちゃんタイプだが、芯はしっかりしたものをもっており、行動半径が広い。一日も早い「春蝶」襲名を待ちたい。

夜の部の五街道佐助は、志ん朝の兄、馬生の弟子である五街道雲助を師匠とする。従って、古今亭一門として、志ん朝を高い峰と仰いでいる一人である。

今回、そのあこがれの師匠との来阪である。入門八年目の真価を大阪の地で問う。

これから二人の若手にも、御大と変わらぬご声援をお願いしたい。

【第877回府民劇場プレイベント】

(財)茨木市文化振興財団第32回公演～今につたえる落語の心と技・その1

こどもと親のための落語会～親子をえがいた落語を楽しもう!

■平成13年5月5日(こどもの日) 午後2時開演 ■茨木市クリエイトセンター(市民総合センター)センターホール

■おはなし/相羽秋夫 ■落語/桂つく枝「桃太郎」 ■太神楽/海老一鈴娘 ■お囃子解説・実演/なにわの会

■入場無料 ■小学生とその親ほか市民400人 ■参加ご希望の方は、住所・氏名・電話番号・入場希望人数を茨木市文化振興財団までお知らせください/申し込み先着順に受けつけ、定員になり次第締め切ります/申し込みは、文化振興財団事務局(クリエイトセンター1階)へ直接お越しいただくか、または電話 25-3055番・ファックス 25-3036番で受けつけます ■主催：財団法人茨木市文化振興財団